

堤中納言物語の漢語

石 綿 敏 雄

一、目的と方法

この論文は堤中納言物語の漢語について語彙論的な調査研究を行った結果を報告するものである。語彙論はひとつひとつの語の意味用法や歴史を扱うのではなく、語の集合である語彙を扱う。この論文では堤中納言物語にみえる漢語全般について概観し、全体的な記述をすることを目的とする。

はじめに漢語を扱うことについて述べる。漢語は中国語という外国語から日本語のなかにはいつてきたことばで、本来は外来語であるが、西洋系のカタカナ語（この論文では洋語と呼ぶ）とは異なるところがあるという（池上頼造『漢語研究の構想』）。外来語としての洋語と漢語は、当然のこととして外来語としての類似点と、また相違点があるに相違ないが、現在までそれについて十分論議されたことはないようである。この種の研究を行うためには、洋語と漢語について共通のフレームを用意することが必要である。これについて、筆者は従来洋語の研究および自然言語処理

の研究において、筆者自身のフレームを用意した。洋語と漢語の比較に際して、このフレームを用いることを考えたのである。

漢語を扱うについて、堤中納言物語をとりあげる理由を述べる。洋語は明治以後急速な増加をみたものであり、近代語の形成に重要な役割を演じた。これに対して漢語は、（近代語に対する）古代語の形成に重要な役割を演じている。漢語は近代語の形成にも重要な役割を演じており、近代語の形成における洋語と漢語の比較の指摘も重要であるが（これについて筆者は、講座国語史第三巻語彙史において言及したことがある）、古代語の形成における漢語のありかたと、近代語の形成における洋語のありかたを比較することも、一つの必要な研究であると考えられる。このためには平安末期の文章における漢語を記述することは意義のあるしごとであると考えられる。平安初期、平安中期のものについては、柏谷嘉弘氏の研究があるので、ここでは平安末期（あるいは鎌倉初期）を扱うことにした。作品として堤中納言物語をとりあげてみた。堤中納言物語は短編小説集なので、分量がそれほど多

くない割には語彙のバラエティーが得られると考えたのである。

漢語の採取にあたっては、漢語かどうかの判定を新潮国語辞典に従って行った。ただし「鬼」(佐藤喜代治「日本の漢語」)、「気(け)」(岩波古語辞典)などきわめて少数の語について別の判断を下したものがあつた。地名「天竺」など、人名(「源」など)は別に扱つたほうがよいと考え、今回採取の対象とはしなかつた。漢語の長さについては漢字二字あるいは一字からなるものを基本とし(たとえば「侍従」「僧」、漢字三字からなるものについては、ひとまとめに扱うほうが妥当なものはひとまとめとした(たとえば「按察使」)。

この論文での語彙の記述は、語の使用領域、語形音形における外来語としての変化、意味における外来語としての変化とずれ、について試みたい。漢字の漢音呉音の区別などについては漢字一字一字を取扱い単位とする立場もあるが、この論文では語彙論の立場から扱うので、漢音を含む語、呉音で読まれる語、などの取り扱いをすることになる。取り扱つた語は異なりで一五八語である。テキストは新潮日本古典集成の本を使用した。

二、使用意味領域

はじめに全用語を一覧することを考えてみる。このためには、たとえば五十音順の語彙表や使用度数順の語彙表などを作成することも考えられるが、ここでは意味による語彙の分類を行つてみる。

意味による分類には、林大氏の「分類語彙表」を使用するのが

普通であるが、筆者は、ここでは自分で作成した一種の分類表を用いた。筆者の「日本語の生成語彙論的記述と言語処理への応用」国立国語研究所報告所収および共著「日本語情報処理」所収の名詞の分類などをもととし、これに修正、補正を加えつつ、平安時代末期の漢語に適用してみた。表中()で統語論的意味論的特徴、いわゆるセマンティックフィーチャーを注記したが、もとより十分なものではない。全体を品詞で分けてある。同一グループ内の名詞の配列には必ずしも十分な意味をもたせていない。

一、名詞

〔人間関係 + hum〕

中宮、女院、齋院、左大臣、右大臣、大將、中將、少將、右大將、大納言、中納言、少納言、式部卿、頭、按察使、帥(そつ、そち)、女御、大輔、命婦、大王、宰相、弁、左中弁、侍従、隨身(官職名等)

主(+abs)

博士、師、大師

講師

僧、法師、尼(+budh.)

仏、あみだ、観音(+budh.)

陰陽師

鬼

〔+ani, -hum〕

蝶

〔+concrete, -ani, -hum〕 柑子、桔梗、菊、玉簪花、紅梅、五

葉、薔薇、菖蒲、紫苑、芭蕉、竜胆 (+ plant)

蘇芳 (+ color)

香 (+ odor)

瑠璃、紫檀、鼠紹 (+ material)

具、料 (+ generalization)。琴、和琴、琵琶 (+ music)。絵、綾、本、義経、観音経 (+ info, + readable)。笏、半挿、几帳、帳、屏風、障子、格子、燈籠 (+ furniture)。纏緇 (この項、+ instrument)

[+ location, + con 時に前2項 + hum]

皇后宮、淑景舎、弘徽殿、宣耀殿、承香殿、麗景殿 (+ building, proper name)

兵衛、近衛、左近、左衛門尉 (+ office)

殿上、寢殿、対、台盤 (所)、廊、縁、前栽

[+ abstract]

本地、是非

愛敬、興、本意 (+ hum)

徳、福地 (+ hum)

故 (+ hum)

持 (ち)

災難

例

要、用

様、様体、気色

宿世、生前 (+ time)

拍子、盤渉調、黄鐘調 (+ time, + music)

五節 (+ time, + num)

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十。三位、四位、一品、尺、寸、人、余 (+ num)

[+ act]

化粧、懸想、消息、対面

南無

[+ quality]

優、掲焉、権 (こん)、大雑、大切、放俗、無下、不用

二、動詞

愛ス、臆ス、興ズ、具ス、御覽ズ、装束ク、誦ズ、制ス、念ズ

三、形容詞

勞タシ、勞勞シ

四、副詞

切ニ、急ニ

以上が全語彙を意味的に分類したものである。以上の語彙全体を概観して気づくことを次にあけてみる。

まずはじめに、職制、官職名に関する用語が目立つことがあげられよう。これは古代国家の体制確立のため、中国を範として機構を形成、整備したためであり、その用語に中国から借用した語彙を充てたためである。その用語のなかには中国における使用法をそのまま借用したものもあったが、そうでないものが多かった。そのことについては、意味用法の変化、ずれの項で、あらためて述べることにする。この、政府機構の漢語多使用は、その後

の幕制にひきつがれ、明治政府に続いた。このため現代でも政府機構の名称に漢語が多用されている。現代では洋語も和語もそのなかで使いにくいような一種のシステムができているが、そのような用語使用の基礎はすでに平安時代に確立していたということができる。別な面からいえば、この点が平安の漢語と近代と現代の洋語の相違ということができよう。

次に植物名、家のなかの調度類に漢語が多くみられることにについて考えてみたい。これらの用語の多くは、さきに述べた政府機構の名称同様、いままでの日本になかったものであるが、植物名、調度名等は具体物であり、それを輸入ないし移入するとき、この名称もまた日本語のなかにとり入れたものである。これは近代、現代の洋語にも多くの例がみられるものである。植物名でいえば、プラタナス、マロニエなどをその例としてあげることが可能であろう。洋語の場合は西欧的なおもむきのある植物であり、中国からのものは中国的なおもむきのある植物であって、この点異なるが、外国からの輸入、移入にともなう名称の移入という点で共通性があるといえよう。この点は調度品類でもまったく同様の現象がみられる。

このような名称の移入には、いくつかの問題がある。そのひとつは、日本製の漢語があることである。たとえば「縹緗」の「縹」は国字であり、このことばも日本製であると考えられる。このような日本製のものがあるという現象は現代の洋語にもみられるものである。ここではスキンスリップという語の例をあげるにとどめるが、和製という現象が漢語にも洋語にも共通にみられるもので

あることは指摘しておかなければならない。名称移入についてのもうひとつの問題は、和語と漢語の併用ということである。まず「琴」の例をみると、「かひあはせ」のなかで、本文中に「琴（きん）の声」とあり、それをとりこんだ歌
行きかたもわするるばかり朝ほらけ

ひきとどむる琴（こと）の声かな

が次に出てくる。「きん」と「こと」とはその意味の範囲がかならずしもイコールではないようであるが、すくなくともここでは同一のリファレントに対して使用している。地の文と歌の使いわけと、漢語と和語の対応がここで比較されてよいだろう。やまとうたのなかではやまとことばが使われる傾向が考えられる。

それと対称的なのは、「逢坂こえぬ権中納言」の、「階のもとと蓄薇もとうち誦じて」の「蓄薇」である。白楽天の詩の一節「階底蓄薇入夏閑」を誦したのであるから、漢詩漢文の雰囲気のみで使われたものであろう。普通語としての「ばら」との差がそこに存在すると考えられる。

植物名、調度名の次に、場所に関する名称を扱ってみる。これには建物固有名、オフィス名、建物名、その部分名などがあつた。これらは中国語を用いた命名であり、従来例のなかった、新しい形式の建築物などに外国語の名称を与えたものであろう。この点は、現代の洋語の命名とある種の共通点をもっている。建物の部分名でも「廊」とか「勾欄」というのに対してコンコースとかバルコニーのような名称があげられよう。

次に、抽象的な概念の関係では、数字の呼称が完備しているこ

とが注目される。ヨーロッパの比較言語学でも、数詞は一般に古い伝統を守りぬぐといわれている。この点日本では日本の伝統を一方には残しながらも、呼称の体系は中国語のそれを全く採用してしまっている点は驚異的である。

最後に、動作の概念や性質状態の表現、動詞、形容詞などに必ずしも少なくない数の語（たとえば「化粧」「懸想」など）が使用されていることに注目すべきである。これらのものの多くは、必ずしも新しいことがらではなく、むしろ新しい表現を求めて使用しているものではないかと考えられる。洋語でいえば、「若者」をヤング、「小さい」をミニというような例がある。「若者」は日本にも昔からいたのだが、それをヤングと表現するのである。

「愛す」「臆す」のように、「す」をつけてサ変動詞にするのが普通であるが、なかには「装束」のように語末を語尾として活用させる例もある。現代の「サボる」「ネグる」もその例であるが、漢語も外国語から外来語への道程をかなり進んでいたと考えることができる。

漢語のひとつの特徴として、一種の莊重な感じ、重みをもった表現という点をあげることができる。おそらく、外国語の表現を価値あるものとみるためにおこることであろうが、堤中納言物語の次の例も、そのひとつに数えることができる。

あやめも知らせたまはざなれば、右には不用にこそは。（逢坂こえぬ権中納言）

この「不用」について、塚原鉄雄氏の注に、「音読する語。断定的な一種の氣迫がある表現」とある。漢語のひとつの面であり、

現代ではたとえば号令のような場面ではしばしば用いられる。たとえば「立つ」といわないで「起立」というような場合である。洋語にはあまり例が多くみられないので、漢語のひとつの特徴と考えられる。官庁では「物品を購入する」「学生証を交付する」などというが、英語でもこのような場合フランス系の用語を用いる官庁英語がある（たとえば上野景福「英語語彙の研究」）。日英いずれの場合にも、中国語、フランス語という外国語要素を使用している点に共通性がある。

三、外来語としての、語形の変化

漢語が中国語から日本語化するに際して、言語構造の差からこるむる変化に、語形音形に関するものと意味に関するものがある。ここでは、語形、音形に関するものを扱う。

まず、「本意」のようなことばは、「はい」と書かれているが、これは語形上は「ん」があるのに、表記の上で「ん」を書かなかったものといわれている。そうであれば、この種のを語形音形の変化に含めないでよいのではないかとすることを、述べておく。

音の変化のうち、母音の添加のことをまず述べる。英語の *ganda* をサラダとしてとり入れるとき *ganda* のように子音に母音を添えている。日本語の音節構造の基本的な性格がここによく現われている。漢語の場合は中国語の入声の語尾子音 P T K のうしろに母音のつく場合が多い。「一」「七」「八」の「いち」「しち」「はち」は T のうしろに母音を添えたものである。「掲焉」（けちえん）、

「五節」(ごせち)、「切」(せち)、「大切」(たいせち)、「帥」(そち)なども同様である。「陰」から「鬼」がつくられるのも類例である。「博士」の「博」の「はか」は母音aの添加、「近衛」の「近」の「こ」は母音Oの添加と考えられる。この種の母音添加のほかに、別な種類の母音添加がある。「主」(シュ↓シユウ)、「女」(ニョ↓ニョウ)、「女御」など、「和」(ワ↓ワウ)「和琴」など)。

次は音の変化ともいうべきもので、さまざまな種類のものがある。ここでは漢字音を『学研漢和大辞典』のカナ表記によって処理することにする。この類のはじめに、日本にもその音があるのに、別な受容をしているものである。洋語でいえば英語の *sheep*, *bad* が日本になるとき本来はセールズマンとなるべきところを、セールズマンとして日本語化する例がある。この発音自体、日本語ではスズ両者が可能なのに、英語のと異なった音形となったものである。山田孝雄『国語の中に於ける漢語の研究』では本邦慣用の字音としてこれを説明している。堤中納言物語では「具」(クーグ)、「芭」(ハーバ)のような濁音化、「近」(ゴン↓コン)のような清音化の例がある。洋語の濁音化の例としてルーズリーフがあるので、漢洋いずれもこの現象があるといえる。

音の変化の第二グループは、日本語にない音の処理である。中国語モルフエーム末の子音mについて、これを「う」に変えるもの(たとえば「柑子」(かうじ)、「ん」に変えるもの(たとえば「観音」(くわんおん)、「琴」(きん)、「和琴」(わうこん)、「三」(さん)、「寢殿」(しんでん)、「御覧」(ごらん)がある。中国語

モルフエーム末のngの日本語「う」化はよく知られている(たとえば「王」)。洋語ではmはカンパニーのように「ン」化もあるがふつうは、*income* インカムのような母音添加が行われる。ngはキングのように「ング」となる。この扱いは漢語と洋語の間に多少の共通点があるが、むしろ多くの相違点があるとみるべきであろう。漢字音をカナ表記すると、中国語の子音の区別が失われてしまう。このため、たとえば「後」「害」の語頭子音(hの有声音)のような子音が日本語のガ行音でとらえられていることがある(資料)。洋語のばあいの *healthy* ヘルシーのような例がこれにあたる。

いわゆる直音化もこの類のひとつに数えることができる。「淑景舎」の「しげいさ」では「しゃ」の「さ」に変る例がみられる。*spa* から *sa* になるので、「障子」(しゃうじ↓さうじ)、生前(しゃうぜん↓さうぜん)、「菖蒲」(しゃうぶ↓さうぶ)、「薔薇」(しゃうび↓さうび)、「承香殿」(しょうきやうでん↓そきやうでん)などにそれがみられる。一方「弘徽殿」(こうきでん)、「化粧」(けさう)、「懸想」(けさう)などでは、中国語第二子音のWが消失している。*Wai-lin* のような変化がある。洋語で類例を求めればジェネラルとゼネラル、イクオールとイコールなどがあって、漢洋がよく似ている。

音の変化の第三グループは音の脱落である(直音化のグループをここに含めてもよい)。「格子」「柏子」の「かうし」「ひやうし」では、Kの脱落がみられる。「大納言」「中納言」「少納言」の「納」(な)は、字の呉音ナフから出たものと考ええると、フの

部分が脱落したのである。「燈籠」(とうろう→とうろ)、「擬宝珠」(ぎぼうしゅ→ぎぼし) などには「う」の脱落がみられる。

「按察使」(あぜち) にはいくつかの音の転化のほか、脱落がみられる。「南無」の「南」ではmの脱落がある。洋語のツーストンカラーには母音の省略がみられる。

第四のグループとして、音の添加ということもある。「誦ズ」の「ずん」では「ん」が添加されている。

第五グループではさまざまな種類の音の転化をまとめていれておく。さきの「按察使」、「桔梗」における「桔」の「けち」から「き」への変化などがこれにあたる。洋語においては lemonade をラムネとすることなどがこれにあたる。

以上は音の環境とは一応独立のものと考えられる現象であるが、このほかに音の連続で生ずるものもある。ひとつは連濁といわれるものである。資料の範囲では、「愛敬」「陰陽師」「擬珠宝」「皇后宮」「講師」「装束」「淑景舎」「隨身」「前裁」「中宮」「中将」「半挿」「屏風」「様体」などのなかの第二または第三モルフェームに生じているもので、音連続の中間部が清音から濁音に変わるものである。洋語では例があまり多くないが、「雨合羽」「赤ゲット」などで生じている。連音のもうひとつは、「三位」san-i から「さんみ」「一品」i-pi-son から「いっぽん」、陰陽(師)on-yan から「おんみゃう」のような連声、あるいは一種のリエゾンともいべき現象である。

以上、中国語から日本語にはいる際の外来語としての語形・音形の変容についてひとわりふれた。全体としてみると漢語と洋

語はかなりよく似た変容を受けているといえよう。洋語も漢語も同じ種類の変容を受けているものが多いからである。そのなかで撥音化の現象など、学界でも漢語の国語音韻組織への影響が論ぜられている。現代では外国語の知識がかなり普及しているのに、音韻が日本語化するということは少ない。そのことから、当時の中国語の影響がきわめて深刻なものであったと考えられる。(音の変容のことでトーンについてはここではふれない)。

以上のような発音の変容があることを考えた上で、漢語の研究でよく言及される漢音と呉音の分布を、堤中納言のデータについて調べてみる。まず表記からどちらの読みか不明なもの、字と読みかたの合致しないもの、国字などを含めての十一語を除いて調べてみた。

呉音と漢音が同音のもの。「愛、要、縁、柑子、菊、几帳、具ス、五、五葉、障子、三、三位、四、師、四位、僧、対、帳、徳、本意、本、様、余、廊、労タシ、労勞シ、綾、料」

呉音と漢音を混用している語。「右大将、皇后殿、弘徽殿、装束、承香殿、大将、大将、大切、中将、殿上、琵琶、不用、麗景殿」

呉音の語。「愛敬、按察使、あみだ、一品、右大臣、臆ス、鬼、陰陽師、香、桔梗、義経、琴、具、具ス、観音、観音経、化粧、懸想、気色、掲焉、講師、五節、近衛、御覽ズ、権、災難、生前、菖蒲、左近、左大臣、左中弁、左衛門、式部卿、侍従、七、十、尺、紫苑、寝殿、宿世、隨身、蘇芳、寸、誦ズ、消息、少納言、切、是非、宣耀殿、帥、大師、大納言、台盤(所)、対面、

大王、持、中宮、中納言、南無、女御、女院、人、念、八、拍子、屏風、兵衛、福地、仏、弁、法師、本地、命婦、無下、様体、瑠璃、六、和琴、絵」

漢音の語。「優、格子、急、擬宝珠（玉簪花）、興ズ、興、故、紅梅、宰相、斎院、薔薇、淑景舎、紫檀、主、制、少將、前栽、帥、大雑、大輔、蝶、頭、燈籠、博士、芭蕉、半插、用、例」

以上の分布を通覧すると、呉音の語がかなり多いことが注目される。古くから用いられ、一般化した語は容易に漢音化されなかったということであろう。しかし漢音を用いている語も決して少なくない。漢音は後世になって呉音から変わったものもあるが、（たとえば「男女」は明治以後「なんにょ」から「だんじょ」に変わった、など）、平安時代からすでにその地歩を固めていたということが、このデータからわかるといえよう。

漢音と呉音の対立は日本への影響の、時代の差と地域の差とがからんでいる。洋語の場合はイギリス英語とアメリカ英語の差がそれにあたると考えてはどうだろうか。ただ現在では英語も動いていて、英語からの影響は地域的にも広く、時間的にも急である。種々の相違の存在も考えられる。

漢音呉音の音形は『学研漢和大典』のカナ表記により、慣用音は漢音、呉音のいずれか近い方に入れて処理した。

四、外来語としての意味の変化

外国語が日本語のなかにはいつて外来語となるとき、もとの言語のなかでの意味用法と日本語のなかでの意味用法との間に相違

やずれが生じることがある。ここではこの問題を扱ってみる。筆者は英語系の洋語の意味用法の相違、ずれについて、四種の区別をしたことがある（小著『外来語と英語の谷間』）。今回はその経験を生かしつつも、さらに簡略にして三種に分けてみる。

そのひとつは外国語の用法と外来語の用法がひとしいか、あるいは外来語の用法のほうが狭く、外国語の用法にはほおさまるものである。洋語でいえば、コーヒー、ジャズなどはほぼ英語の用法に等しいといえよう。またファンブルという外来語は外国語である英語の *fumble* からの日本語化であるが、野球という領域での日本語化であったので、ファンブルの意味は英語のいくつかの意味のなかの野球の意味に限定されてしまった。そこで野球用語についていえば日英共通である。この類を漢語について、中日共通ということにする。漢語の例として「法師」についていえば、『学研漢和大典』では①僧。②唐代、道士の尊号の一つ、と説明してある。堤中納言物語の例は、このうち①のに相当するものなので、日中共通というグループにおさめるのである。「屏風」は同字典で、室内にたてて、風よけや仕切などに使う道具、という解説がある。中国の辞海でも同様の説明がある。これも中日共通のグループに入る。

中日共通のグループには調査の結果、ほぼ次のものを属せしめた。異品詞語については漢語の部分だけについて考える。「愛ス、按察使、尼、あみだ、優、一、要、香、格子、柑子、高欄、桔梗、菊、急、玉簪花（擬宝珠）、興、興ズ、九、具、皇后宮、観音、観音経、化粧、気色、五、紅梅、権、災難、生前、装束、薔

薇、三、三位、師、四、侍從、紫檀、七、十、尺、主、四位、紫苑、寢殿、宿世、蘇芳、寸、誦ス、制ス、消息、切、是非、僧、大雑、大師、対面、大王、帳、中宮、蝶、殿上、燈籠、徳、南無、女御、人、念、芭蕉、八、琵琶、拍子、屏風、福地、仏、不用、本意、法師、本、本地、様、余、廊、旁、旁旁、綾、竜胆、瑠璃、例、料、六、絵」

この種の意味分析は、音形の処理ほど明確でないところがあり、微妙な部分が多い。調査の方法いかんでは判定にゆれが生ずる場合がありうる。そこで、『学研漢和大事典』を用いて、できるだけ単純な方法で判定することにした。

意味用法の相連の第二は外来語に日本語独特の用法と外国語の用法とがある場合で、ここではテキスト（堤中納言物語）の用法が日本独特のものであると判断される場合である。外国語の用法と同じものは、中日共通グループの方におさめてある。外来語のうち洋語の例では、たとえば「カー」がある。自動車という意味では、日本語では乗用車も、トラックもふくめている。「マイカー」というときは乗用車を指すのが普通だろうし、「大型カーの規制」というときはトラックなどというときはトラックなどという。英語ではcarは乗用車を意味する。そこでアメリカ人はダンブカーはおかしい、和製英語であるという。この論文では特定のテキストを扱っているのです、このうち、「大型カー」のような用法を第二グループとする。「マイカー」の「カー」の部分は、英語の用法と同じなので、第一のグループに入れる。

第二グループの漢語の例としては、「講師」の例をあげてみる。

「講師」は『学研漢和大事典』では、一、コウジ①学問や技術を講義したり、指導したりする人。②「国」講演をする人。③「国」大学の教員の職名の一つ。（中略）④「国」大学・高等学校などで、依託されて、特定の学科を教授する人。二、コウジ「仏」法会などで仏典の講義をする僧。三、コウジ「国」宮中の歌会などで歌をよみあげる役の人、のように記述されている。「こうじ」と読むのには、仏教のことだと「国」の用法があるが、「国」は漢字本来の意味と異なった日本語独特の意味・用法であるという。枕草子の「説経の講師は顔よき」は上述の二の意味、堤中納言物語の「根合はてて、歌のをりになりぬ。左の講師左中弁」では上述の三の意味であると考えられる。この種の判定作業も微妙なものが多く、推測によったものが少なくない。

第二グループに属する資料内の用語は次のとおりである。「愛敬、一品、縁、臆ス、琴、具、懸想、掲焉、故、講師、近衛、御覧ズ、宰相、斎院、菖蒲、隨身、帥、対、持、殿上、頭、博士、兵衛、弁、命婦、様体、用」

第三のグループは日本独特の用法の語である。洋語の例ではカメラマンなどがそうであろう。英語ではテレビカメラ、映画撮影カメラのオペレーターであるが、日本ではそれはほとんど意識されず、むしろ「写真家」のような感じで使う。しかし「写真家」は英語でphotographerという。そこで日本というカメラマンは、まず日本独特といえる。洋語のガソリンスタンドは、英米の言いかたと異なる、和製英語である。これに類する漢語の例としては「纏網」がある。「纏」は国字だから「纏網」は和製漢語である。

「障子」について『学研漢和大事典』では解説全体に「国」がついている。これも第三グループに属するものとする。

第三グループに属する資料内漢語は次のとおりである。「縹緗、右大将、右大臣、鬼、陰陽師、義経、几帳、五葉、弘徽殿、四節、障子、笏、左近、左大臣、左中弁、左衛門、式部卿、淑景舍、少将、少納言、宣耀殿、前栽、承香殿、大将、大切、大納言、台盤、大輔、中将、中納言、女院、半挿、盤渉調、無下、麗景殿、和琴、黄鐘調」

意味の変化全体を概観すると、日本独特の用法が非常に多くなっていることがわかる。漢語は日本語のなかで勢力をのばすと同時にかなり日本化もしていた。これが平安末期における漢語の一

般的な状態であった。

漢語と洋語の比較については、ここで行った分析のはかに語構成上の問題、(どんな感じで語を使用するかという) 語の使用の問題そのほか種々の問題があると思う。そのうちのいくつかについて、「近代語としての外来語」(『日本語学』一九七八、六)のなかで述べておいた。洋語と漢語の類似点、相違点は、受容の時代とその当時の日本語の状態、外国語(英語と中国語)の構造と文化、日本語のなかの意味分野、ニュアンス、受け入れかた、表記など広範囲な問題を擁しているが、これからの日本語を考える上で重要な問題だと思う。この論文はそのためのひとつの研究作業の報告である。

新刊紹介

菊池威雄著

『柿本人麻呂致』

著者の論文が、未発表の七本を併せて此の度まとめられた。

第一章「挽歌の生成」、第二章「殯宮挽歌」、第三章「愛の挽歌」、第四章「人麻呂

の思想と人生」、第五章「人麻呂伝承」。その章立てからみても明らかのように、菊池氏は、常に一つの定まった視点から人麻呂を追いつけてきている。そして、その視点で「挽歌」であることが、本著に於いて改めて確認せられた。

祭祀権を持ち、靈魂を見つけてきた后宮と深く関わりのあるワニ氏の一支族柿本氏、という背景に根ざしながら、同時にそ

れを否定するという内的矛盾こそ、人麻呂の雄渾なる調べの源泉であり、この内的苦闘が最もよく発揮されているのが挽歌である、と氏はその視点を定めた理由を述べている。単なる一万葉歌人論ではなく、古代を考察する杖としての人麻呂論であり、多方面の方々に刺激的な一冊だ。

(昭和62・10 新典社 A5判 三九七頁 一二〇〇〇円) [服部芳子]